

史 談

2018 (H30) 4. 25

■ 史談会研修会が開催されました



29年度の研修会を下記のように開催しました。会員だけでなく、一般の方々にもおいでいただき、賑やかな会でした。また、内容もさまざまな歴史資料の発掘や郷土を訪問した東大総長のこと、そして白鷹町の地質学的な歴史まで、幅広い話題の研修会でした。大雪の中でしたが、その後の懇親会や二次会までも含め楽しい会合でした。

- 1. 日時 平成30年2月17日(土)
 研修会：午後1時30分～3時15分
 懇親会：午後3時30分～5時

2. 会場 荒砥地区コミュニティセンター

3. 内容

- ① 黒鴨の古民家に残された資料の調査について (石井紀子)



② 矢内原忠雄の講演会のこと (丸川二男)

③ 白鷹町の地史について (加藤晃一)



■ 金田平三郎のお猪口と繭文字額について

石井紀子

黒鴨の迎田伊蔵家に保管されていたお札の調査をしていたところ、お猪口(図1)が見つかった。

お猪口には以下の図のように文字が書かれており、蚕桑村の金田平三郎が第五回国内勸業博覧会で一等賞を受賞した記念に作った。

金田平三郎は蚕桑村横田尻の蚕種家(お猪口には蚕種製造人とある)で、瑞龍院の繭を並べて文字を書いた繭文字額(図2)の奉納者である。住所は「山形県西置賜郡蚕村」とあり、蚕桑村の「桑」の字が抜けている。中央に金字で表された又昔が博覧会で評価されたとみられ、他にも小石丸、玉奥飛白の品種を育てていた。玉奥飛白は馴染みのない名前だが、飛白の一種であろう。



図1. 金田平三郎お猪口



図2. 繭文字額 (瑞龍院)

内国勸業博覧会は、西洋技術の紹介、国内産業の競争・発展を目的に企画され、明治10年(1877)に第一回を東京で開いた。

第五回博覧会は明治36年(1903)に大阪で開催された最後の博覧会である。日清戦争(1894-95年)の勝利により各企業が活発に市場を拡大していたこと、鉄道網がほぼ日本全国にわたったことなどから博覧会への期待が大きく、会場の敷地は二倍に増え、会期は最長の153日間となった。

『第五回内国勸業博覧会受賞人名録』には受賞者が県ごとに一覧で発表されており、山形県一等賞の欄に「繭 西置賜郡蚕桑村 金田平三郎」と記載されている(注1)。山形県内の出品点数は4,442点、うち受賞者は500人おり、一等賞は6人。繭の受賞者は21名で、うち白鷹町内では二等賞に中川吉三郎(蚕桑)、三等賞に中川吉兵衛(蚕桑)、中川嘉兵衛(蚕桑)、芳賀周儀(蚕桑)が受賞し、蚕桑村における養蚕業の隆盛がうかがえる。

なお、当会の総出品数は346,454点、受賞者は36,334人、一等賞は510人が受賞した。

(一等賞の上に名誉金牌、名誉銀牌がある)

金田平三郎は勸業博覧会が開催された期間(3月1日~7月31日)から間もない8月19日に、繭文字額を奉納している。今まで繭文字額は養蚕安全の祈願や豊作の喜び・感謝を表して奉納されたものと考えていたが、奉納のきっかけに博覧会の受賞があるとも推測される。

繭文字額に使用された繭は小石丸、天盛蠶だが、お猪口に金字で書かれた又昔の表記はない。

一番右の「神」の字に使った繭の品種名は記されていないが、これが又昔なのだろうか。

繭文字額の左端には奉納者と表具者の名前が書かれており、表装は植木清作が担った。清作(1869~1955)は山口で写真館(植木清光館)を開いた人で、同時に時計屋を営み、時には自家発電をしたなど「山口の平賀源内」といわれた多才な人物であった。また、清作は4歳の時に金田平三郎の家から植木家へ養子に出たとされ、本額は親子の名前が連なった作品であることも注目したい。

注1 小倉政次郎 編『第五回内国勸業博覧会受賞人名録』1903 p.381 東浪館書房

(この論考は2月17日の研修会での発表に関連したものとして寄稿してもらいました。編集担当守谷)

■ 蚕具・マブシ考

丸川二男

養蚕の盛んな頃はありふれた道具でさして関心もなかったが、いざ無くなってしまうと、あれはどうしたろう、どこかにないかという話になる。マブシもそのひとつである。

養蚕における道具は種類も多く、移り変わりも激しいだけでなく、地域による違いもある。収集や保存、管理に手が回らないのもわからぬことでもないが、そうしている間にも家の改築などによってつぎつぎと廃棄処分されていくのである。

マブシという道具ひとつについてもこの地域では実態が明らかではないが、この間に出た印刷物などでいわば「上書き」されてしまい、以前にあつたものが、無かったかのように受け止められてしまうのは困ったことである。

それもこれも、マブシについて最近まで私も

気がつかずにいたことがあったからである。つまり厚紙を組み合わせて木製の枠に組み込んだ「回転マブシ」はごく最近のもので、それ以前にワラで作られたマブシがあり、その中にもまた違う種類のものがあったのである。しかもそれぞれに道具というか、小さな器械と呼ぶべき物があったのだから驚きである。

少しくどくなるが、私たちの身のまわりの物にはたいてい名前があり、それを作った人や作り方がわかっているものだが、こと養蚕の道具になったりするとその名前も道具も、ましてその作り方などとなるとわからないものが多いのが現実である。ワラで作られたマブシを見てもどんな道具を用い、どんな風に作られたのかは想像すらできない。

そこで、かつて手にした三角の山の形をしたワラのマブシはどのようにして作られたのだろうか、という素朴な疑問が湧いてきた。年配者に聞いたところが「まぶし折り機」という器械があったと知り、それを探していたら近くの伊藤一夫さんが古くからの友達つきあいしているという中山の沼沢啓次さんのところから現物を持ってきてくれたのである。それは初めて見るもので、使い方などはまるでわからない。以前に話の中でそうした器械があり、使ったこともあるとっていた金田睦夫さんのところに持ち込んだところ、金田さんはその器械を小屋の中に仕付けて、自前のワラを使って実際に折って見せてくれたが、この器械のことや作業のことを「ガチャガチャ」というのは、まさにその通りだった。



いつごろ誰によって考案されたかわからぬが、よく見ると実によく出来ているもので、相当数が全国に出回ったものだろう。この器械の裏には焼印がおしてあり、特許と実用新案の番号であるのもうなずける。

しかし、これで折られた「まぶし」は折られたワラの束がそのままの形に二、三本のワラでくくられているだけで、使う時にこのワラひもを解くと三角の山の形をしたものができ、それを蚕の上にバラバラとかぶせるのだという。となるとこれは一回しか使えない。私がかつて手にしたものはワラで編んであり、使い終わるとたたんでおいて、繰り返し使っていたものだった。

だが「マブシ」の語源は定かではないが、いわゆる「粉をまぶす」の「つける」「まみれさせる」という意味で、「蚕にワラをつける」というのは合っている気がする。今でも「上簇（じょうぞく）」という言葉は使われているし、マブシに「簇」の字をあてていることからすれば、理解できないことでもない。

しかしそもそも形が違うし、作り方も異なれば名称が違っていてもいいはずだが・・・などと思っていたら「改良型ワラマブシ」という言い方があるという話を聞いた。感覚としては「折る」というよりも「編む」という感じに近いのだが、そのための道具は・・・思っただけで試したら自分の小屋の中から出てきたのである。

しかしこれまた使い方はわからず、まとも金



田さんに実演してもらって、ようやく事の次第を納得したのである。やはりワラを「折る」というよりも「編む」に近いが、これはこれで単純な構造の道具でありながら、作っている時の作業を見ても、出来上がったものを見ても、きわめて複雑な形をしたものが編まれるのだから驚きでもある。道具を考えた人も偉いが、やはり人の手も偉いものだと思う。「手が勝手に動く」ともいいながら、さして力もいらず、世間話をしながら冬仕事に編んだものだという。



調べてみると『白鷹町史』下巻の養蚕の「上族」の個所には、

「マブシはカゴマブシかバクロマブシで、手で折ってつくったものである」

「マブシはその後器械まぶし、回転まぶしと改良され、材質もわらから厚紙へと変わり・・・」という記述があるのだが、写真や図版がないので具体的な形状はわからない。しかも器械で折られたマブシを使っている作業は見たことがないせいか、私が手にしたものが「カゴマブシ」なのかどうかもわからないが、残っている物や話からは編まれたマブシの方が後のような気がしている。

■ 平成30年度白鷹町史談会総会・特別講演会の御案内

事務局からのお知らせ

本会事務局長の守谷英一さん（荒砥）が博士号を取得されました。

守谷さんは、高校の教員を退職後、東北芸術工科大学大学院に在籍し研究を進められていましたが、この度、博士論文「近現代社会における在来の手仕事の社会文化的環境適応」を提出し、博士の学位を東北芸術工科大学から授与されました。論文の内容は、白鷹紬や深山和紙等、町内及び県内に伝わる手工芸にスポットを当て、地場産業としての歴史や生活文化について深く掘り下げまとめられた論文が高く評価されたものです。守谷氏は、置賜民俗学会や白鷹町史談会にも所属され、白鷹町文化財保護審議会委員としても活動いただいております。今後ますますの御活躍を期待いたします。

白鷹町史談会では、学位修得を記念し、本年度の総会で渋谷敏己さんの研究発表とともに守谷さんの特別講演会を企画しました。是非おいでくださいますようお願いいたします。

（文責 事務局斎藤）

平成30年度白鷹町史談会総会・特別講演会

▼いつ 5月26日（土）

総会 午後1時30分～

研究発表会・特別講演会

史談会総会終了後、午後2時ごろから

▼どこで 鮎貝地区コミュニティセンター

▼内容

研究発表 渋谷敏己さん「伊達氏と能」

特別講演 守谷英一さん「手仕事の生活誌～白鷹紬と深山和紙を中心に」

終了後、懇親会を予定しております。

▼参加料

講演会：無料

懇親会：1,500円（会員は1,000円）

▼主催 白鷹町史談会

■申し込み・問い合わせ

教育委員会 生涯学習・文化振興係

☎85-6146